

学習者とテキストとの出会い

村山 太郎

物語教材を読むということは国語の教室では日常的な営みである。だが、その営みの中で学習者は何をしようとしているのだろうか。本稿はこうした問いを立て応答しようとするものである。

1. 中学1年生の読みの課題

1-1. テキストの問い掛けと呼び掛け

2010年6月16日(水)、1年C組(男子21名、女子20名)で別役実「愛のサーカス」(同『山猫理髪店』(三一書房、1979)初出、東京書籍『新しい国語1』採録)を教材として、稿者は示範授業(教育実習B)を行った。本稿は、この示範授業を組上に上せ議論するものである。

本示範授業は、中学1年生の学習者に見える読みの課題を相手取ろうとしたものである。その課題とは、本示範授業直前での別役実「空中ブランコ乗りのキキ」(同『黒い郵便船』(三一書房、1975)初出、三省堂『現代の国語1』採録)の初発の感想に露わに見える。

別役実「空中ブランコ乗りのキキ」は、世界で唯一「三回宙返り」ができる空中ブランコ乗りのキキが主人公の短い話である。観客は、まるで鳥やヒヨウのようにしなやかに演技するキキに盛大な拍手を送り、キキもその拍手をととても大切に思っていた。だが、ある日、金星サーカスのピピが「三回宙返り」にとうとう成功したという話を老婆から告げられ、自分の人気の落ちることを嫌って、キキは「四回宙返り」に挑戦する。その際、ピピの成功を伝えた老婆から、「四回宙返り」を絶対に成功させるという魔法の「澄んだ青い水の入った小瓶」を受け取っている。老婆いわく、「これを、やる前にお飲み。でも、いいかね。一度しかできないよ。一度やって世界中のどんなブランコ乗りの受けたことのない盛大な拍手をもらって…それで終わりさ。それでもいいなら、おやり。」と。はたして、澄んだ青い水を飲み、「四回宙返り」に挑戦したキキは、「次のブランコまでたっぷり余裕を残して、四つ目の宙返りをし」、観客の「どよめきが、潮鳴りのように町中を揺るがして」、「みんな思わず涙を流しながら、辺りにいる人々と、肩をたたき合いました」が、「でもその時、だれも気づかなかったのですが、キキはもうどこにもいなかったのです」。そして、「翌朝、サーカスの大テントのてっぺんに白い大きな鳥が止まっていた、それ

が悲しそうに鳴きながら、海のほうへと飛んで行ったと言います」と、短いお話は幕を閉じる(三省堂『現代の国語1』所載、別役実「空中ブランコ乗りのキキ」)。

如上、本話は、命を懸けてお客さんの盛大な拍手を得て、結局いなくなるキキを語るものだが、問題は、キキとおぼしき「白い大きな鳥」が「悲しそうに鳴きながら、海のほうへと飛んで行った」と語られていて、本テキストの書き手(言表行為主体)がキキの生き方を幸福なものとして読者に差し出してはいないことだ。とすれば、キキが後悔の鳴き声を漏らしもし、書き手が問題ありとも見ているのは、「お客さんの拍手がもらえないぐらいなら死んだほうがいい」として、四回宙返りを決断したキキの考え方であろう。換言すれば、書き手は、後悔するキキの姿を語ることで、他者からの評価(拍手)を得るために、求められていることが何であれ、自らの命を懸けるという生き方を問い掛けようとするのである。

さて、そのように本教材テキストの言語行為を眺めてみると、書き手の問い掛け方をうかがうのに、看過できない点がある。それは、命懸けで得ようとした「お客さんの拍手」はキキの演技に対する評価では決してなかったことを、テキストが繰り返し語る点だ。例えば、キキの他に「三回宙返り」の成功が伝えられるとそちらに拍手をするだろうと作中人物に予想されたり、人間離れした感動的な演技を見せた結果、鳥になったキキの行方に「だれも気づかなかった」にもかかわらず、感動して拍手を超えた拍手(=どよめき)はする「お客さん」の姿がそれである。つまり、「お客さん」は“人間離れした演技で感動できれば何でもあり”で、その拍手は、生身の人間が人間離れの身体技能を見せたことへの感動という反応でしかない。

結局、キキの演技に興じる「お客さん」やその拍手は、感動にとりつかれた消費者とその消費の快楽とを伝えるものでしかない。だが、キキにとって、その大きさは自分の特徴と努力とが認められたことの証しで、私の正しさが確かめられる何よりの瞬間だ。だからこそ、キキは、人間離れした、あゆやヒヨウや鳥のよう

なサーカスの演技を見たいとする消費者の欲望に応えるのである。はたして、キキは、身を賭して演技を敢行し、消費欲の充足を伝えるお客さんの享楽の声（どよめき・涙）の中で、誰にも気付かれずに白い鳥になる。白い鳥の悲しそうな鳴き声。それはあれほど執着した「お客さん」の「拍手」の正体に気付いたキキの声だったかもしれない。

以上のように、書き手は「お客さん」の拍手の正体を暴きつつキキを語り差し出すことで、《人間の生き方として、他者からの評価を内面化しその評価を自分の生きる糧にして、完璧に応えようとするものがあるが、でも、これっておかしくない？》と問い掛け、悲しそうに鳴きながら飛び去るキキの姿を語ることで、《いやいや、他者からの評価の正体が感動という反応であるとするれば、それに命を懸けるなんて決して幸福なものではないよね》と、読者に呼び掛ける。だから、本話は学習者にとって、テキストの問いを共有して人間の生き方と他者からの評価との関わりを考え、本話の呼び掛けをにらんで自己の生き方について思索をめぐらせるのに、絶好のきっかけとなり得る。そのような学びの場を開くものとしてある。そう見積もって授業は考案された。だが、案に相違して、学習者初発の感想にはそもそも幸福になれなかったキキを称揚するものが散見されるのである。これが、中学1年生の読みの課題と見えるが、その感想ではキキの生き方はいかに称揚されるのだろうか。

1-2. テキストとの出会い方

それは「お客さんから大きな拍手をもらいたい」（1年女子）という思いを貫いた「決意」（1年女子）の強さを、キキの生き方から取り上げて称揚するというものである。「お客さんから大きな拍手をもらおう（お客さんを喜ばす、驚かす）ために、死ぬと言われても四回宙返りをしようとする」（1年男子）ことは、「普通は出来ないと思う」（1年女子）から。代表的なものが以下に挙げる例である。

- 1 キキは、世界一のブランコ乗りでしたが、いつかそれも一位ではなくなるのではないかと心配し、四回宙返りの練習をしていましたが、成功することはなく、ずっと三回転宙返りは自分だけで欲しいと祈るばかりでした。／でもついに、ピピが成功してしまったので、四回転宙返りで、死んでもいいから拍手をもらいたいと思う一心で挑戦しました。／僕はキキは決してあきらめず、お客さんが満足してくれたらそれで自分は死んでもいい、と客を第一に考えるのは、とても勇気のある決断

だ」と思います。おばあさんに死ぬよと言われても絶対に自分の考えをねじ曲げない粘り強さも大切だと思いました。キキは、本当は死ぬのがものすごく怖かったのだと思います。でもそれ以上に客を喜ばせたかったのだらうと思う。（1年男子）

傍線部のごとく、キキの生き方（「キキは決してあきらめず、お客さんが満足してくれたらそれで自分は死んでもいい、と客を第一に考える」こと）を、「とても勇気のある決断だ」（括弧）と称揚するのは、そこには「死ぬよと言われても、絶対に自分の考えをねじ曲げない粘り強さ」（波線）があるから。つまり並一通りではない信念の固さという点で、キキの生き方は称揚されるのである。

このように、別役実「空中ブランコ乗りのキキ」を読んだ学習者の多くが、キキの生き方を称揚する初発の感想^{*註1}を書くのだが、その書きぶりは「翌朝、サーカスの大テントのてっぺんに白い大きな鳥が止まっていて、それが悲しそうに鳴きながら、海のほうへと飛んで行ったと言います。」（別役実「空中ブランコ乗りのキキ」、三省堂『現代の国語 1』より）というキキの差し出され方には無頓着なものである。だが、その無頓着さは、「お客さん」からの評価（拍手）に空中ブランコ乗りとして最後まで執着したことを称揚する点で、先述の言語テキストの側からする呼び掛けとは全く接点を持たないということでもある。この呼び掛けこそが、物語のメッセージであるならば、そうした学習者は本教材テキストと出会えてはいない。むしろ、本教材テキストを、他者からの評価（拍手）を絶対化し幸福になった人間の物語に書き換えて、「死ぬよと言われても、絶対に自分の考えをねじ曲げない粘り強さも大切だ」というメッセージを受け取ろうとするのである。

多くの学習者が、作中人物の読者への差し出され方、それは書き手の作中人物に対する評価を伝えるものだが、それを踏まえずに作中人物を意味づけ、別の物語に書き換えること。これこそが中学1年生の初発の感想に見える課題である。

だが、なぜ学習者は一様にこうした読みに陥ってしまうのだろうか。

2. 読みの課題の分析

2-1. 読解のシステム

そこには、眼前の物語を変形させることで、自分にとって理解できる〈物語〉として受け入れて落ち着

うとする、読解システムの介在があったのだろう。というのも、人間には多様な現実や出来事との出会いの中で、ひとまず自分の世界観に即してそれを変形させることで、読解の実感や落着の情を得ようとするところがあるからだ。その現実や出来事が、当人にとって読み解くには困難な場合であればなおさらである。そのことを〈物語〉の役割という観点から説明する文章を、以下に挙げよう。

2 物語は本を開いたときに、その本の中だけにあるのではなく、日常生活の中、人生の中にいくらかもあるんじゃないかということです。／たとえば、非常に受け入れがたい困難な現実にあつたとき、人間はほとんど無意識のうちに自分の心の形に合うようにその現実をいろいろ変形させ、どうにかしてその現実を受け入れようとする。もうそこで一つの物語を作っているわけです。／あるいは現実を記憶していくときでも、ありのままに記憶するわけでは決してなく、やはり自分にとって嬉しいことはうんと膨らませて、悲しいことはうんと小さくしてというふうに、自分の記憶の形に似合うようなものに変えて、現実を物語にして自分のなかに積み重ねていく。そういう意味でいえば、誰でも生きている限りは物語を必要としており、物語に助けられながら、どうにか現実との折り合いをつけているのです。(小川洋子『物語の役割』(筑摩書房、ちくまプリマー新書、2007))

挙例のごとく、小川洋子は、当人にとって「非常に受け入れがたい困難な現実にあつたとき」、「自分の心の形に合うように」「現実を物語にして」、「どうにか現実との折り合いをつけている」と、人間と現実との関係を〈物語〉の役割から説明する^{*注2}。換言すれば、当人にとって落ち着かない現実と出会ったとき、自分にとって理解できる〈物語〉に変形させて落ち着こうとする読解システムが人間にはあるということだ。とすると、先述の学習者にとって「非常に受け入れがたい困難な現実」とはこの場合、別役実「空中ブランコ乗りのキキ」というお話のこと。そして、これと出会ったとき、無意識的に別の〈物語〉に書き換えたのは、そうすることで別役実「空中ブランコ乗りのキキ」という「現実」を「自分の心の形」という鑄型(=〈物語〉)に嵌め込み、自分にとって受け入れられる〈物語〉に成型し落ち着こうとしていたのだろう。先述の学習者たちは、かかる読解システムを立ち上げつつ、教材テキストを了解していたとおぼしい。

2-2. テキストの「きめ細かな感触」

なるほど、こうした読解システムでの〈物語〉は、自分の世界観を暴力的に否定する現実を、受け入れなければならない場合、素裸の現実をフィルタリングする役割がある。その意味で人間は「物語に助けられ」ているとは言えよう。一方で、別役実「空中ブランコ乗りのキキ」という現実と出会った学習者たちにとって、〈物語〉は教材テキストのメッセージを切り捨てさせる役割を果たしてもいる。そうした負の側面も、〈物語〉の役割にはある。その正／負の両側面を鷺田清一は次のように指摘する。

3 現実を語る時、あるいはじぶんを語る時、都合のいい物語であれ、強迫観念のようにまとわりついてくる物語であれ、物語から外れるということはむずかしい。しかし考えてみれば、物語ほどすべりのいいものはない。たとえ不幸な物語であれ。／物語は現実のすべりをよくする。けれど、きめ細かな肌を求めて脱毛することで、逆に物のきめ細かな感触を失うように(なぜなら、物の感触をわたしたちはうぶ毛にかかる微細な圧力で感じるのだから)、すべりがよくなりすぎても現実というものにふれられなくなるのだ。(鷺田清一『死なないでいる理由』(小学館、2002))

自分にとって「非常に受け入れがたい困難な現実」としてのテキストと接して、理解しがたいところを切り捨てることで自分の受け取りやすい〈物語〉に再構成することは「現実のすべりをよくする」。しかし、それは、自分の感じ方や見方とは異質な現実の「きめ細かな感触」にふれることとは、再構成された〈物語〉に強度があればあるほど、無縁のことになる。とすると、初発の感想で別の物語に書き換えて受け取った学習者の課題とは、次のような問題点を抱えるものとして理解すべきだろう。

私とは異なる、ある特定の人間の著述したものがテキストであるならば、多くの学習者にとってそれとの出会いはすべりがわるい現実との出会いとなるはずだ。つまり、そもそもテキストは学習者の「心の形」という規則性に収まりきらないような、異質の他者としてある。だから、学習者にとって教材テキストとの出会いとは、教材テキストの他者性に気付くということである。だが、教材テキストが、その異なりを取り除かれてしまえば、それは学習者にとって他者ですらない。他者を我有し、もって読了の感触を得ようとする。そうした問題点である。

また、このように問題点を顕在化してみると、書き換えた物語を称揚する学習者の反応の仕方も看過できない。なぜなら、すべりのよくなった現実(=「自分

の心の形に合う」〈物語〉)を称揚するとは、とりもなおさず、彼(女)自身のあらかじめ持っていた「自分の心の形」を称揚することだからだ。

他者性の排除と自分の感じ方の称揚。作中人物の読者への差し出され方を踏まえずに意味づけて別の物語に書き換える学習者の課題とは、かかる問題点を内側に抱えることでもあった。

中学1年生の読みの様態を以上のように析出し観察すれば、その課題は単に誤読レベルで理解されるようなものではない。それは、他者の自己化、自己像の強化という問題点とともに理解されなければならない課題である。別役実「愛のサーカス」を教材とした示範授業(教育実習B)はかかる問題点をにらみつづけるものであった。

3. 課題への応答に向けて

3-1. 別役実「愛のサーカス」

まずここで、教材(別役実「愛のサーカス」)の概略を述べよう。

別役実「愛のサーカス」は、ある港街に少年と象が筏で流れ着く場面で始まる。少年は無口だったのでなぜ流れついたのかという事情は分からなかったが、つつましく穏やかで時折寂しそうな表情をするので、港街の人々は親身になってその少年を思いやるのである。ところが、サーカス一座の団長クグと名乗る男が突然やってきて、少年はその一座のスター団員だと明かし、しかも彼は興行をしていたのだと告げる。あつけにとられる街の人々に対してクグが言うには、「皆さん。皆さんはそれ(※少年の喜ぶ姿)を見て、感動したはずですよ。そうですよ、皆さん。これが私たちのサーカスなんです。愛のサーカスです…(中略)…いいですね、それではフィナーレです。」(* ()内※は稿者注。以下同じ)と。つまり街の人々は団長クグの仕掛けた観客参加型の芝居にのめり込んでいたというわけである。ところが、事情を告げられても街の人々は少年の芝居のフィナーレが見たくて目を離せないのも、現実的に考えれば不思議な仕組みになっているこの興行に、だが、言われるままに見物料をたっぷりと支払うのである。そして、手荒く少年を馬車に閉じこめ街を去るクグの姿でこのお話は終わる(東京書籍『新しい国語1』所載、別役実「愛のサーカス」)。

如上、本話のポイントは、少年への思いやりに溢れる街の人々とそうなるように仕組んだ狡智な団長クグとを対比的に描きつつもクグの成功を語り、まんまと

クグの仕掛けにはまったという点で街の人々の失敗を語る場所にある。つまり、乱暴に図式化すれば、悪人が成功して善人が失敗するお話なのである。だからといって勧善懲悪の話として本話があるというわけではなく、少年に情けを掛ける善人(=街の人々)のあり方をこそ問い掛けるものとして本話はある。

この場合、善人のあり方とは、クグの演出した美しい筋書きに夢中になってしまっ、団長クグの言い分を疑おうともしなかったり、筋書きにない少年の姿、それはクグに手荒く扱われる姿だが、それには無関心であったりするあり方である。本教材テキストはそのような街の人々のあり方を問い掛け、街の人々から見物料をたっぷりとせしめるという団長クグの成功を語ることで、「美しいお話に対して無闇に感動ばかりしていると現実感を失って搾取されますよ」と読者に呼び掛けるのである。

3-2. 違和感の落とし所

別役実「愛のサーカス」の概略は以上の通り。では、本教材テキストと学習者はいかに会うのであろうか。次に掲げるのは、本教材テキストを読んだ学習者初発の感想である。

4 無茶苦茶な話。いくら物語とはいえ、内容がいきすぎている。確かに、象を持っているという点では違いますが、それ以外はただの少年。三回宙返りを成功させる話かと思って後悔した。まあ、一日目、二日目はいいとして、それ以降はねえ……。第一こんな無茶苦茶なサーカス聞いたことがない。それに、団長は一体何考えてんだ。少年に母親がいなくて町人が思いやっけてあげていたのに、母親をフィナーレで出すなんて。よくみんな金が払えたね。インチキ商売にも程がある。ウルじいさん(※少年を見つけた最初の登場人物)は払わなかっただろうね。(1年男子)

5 この「愛のサーカス」には、自分としては疑問が一杯である。第一、少年と象は海から来たのだが、金星サーカスのクグはどこからこのピピ少年と象を流したのか。海の旅は危険である。そのようなことを少年一人にやらせていいのだろうか。少し考えがずれているのかもしれないが、気になる。クグ団長の言うことは分かる。本当の感動はサーカスの中ではなく日常の中にある、ということだと思ふ。良いことを言っているとは思いますが、それでかせぐのは少年に負担が大きい。／いったん母親と離ればなれにするのはかわいそうである。それに、自分の意見を言うと、クグ団長こそこのピピ少年に愛を持って欲

しい。そしてそれでもやるのであれば、無料でやって欲しい。そこにも、大きな感動が生まれるはずである。(1年女子)

如上、「疑問が一杯」(用例5)で「無茶苦茶な話」(用例4)として本話を受け取ろうとする学習者の姿が確認できる。一方で、学習者は波線部のように「クグ団長こそこのピピ少年に愛を持って欲しい」(用例5)としたり「団長は一体何考えてんだ」(用例4)としたりして団長クグを批判することでその違和感の落としどころを探ろうとする。次に挙げるのもその一例である。

6 僕は、この物語の最初の方を読んでいると、どういう話か解らなかった。タイトルの意味も解らずに読んでいたら、最後にどんでん返しが待っていた。
 /金星サーカスのクグは、「どんな名人の、どんなにすばらしい離れ技も、何も知らない何もできない少年の純真な魂ほど感動的ではないのです。」などと言っておきながら、その「純真な魂」を利用して、金をかせぐ、ある意味「オツベル」と似通ったところがあると思う。人や動物、命あるものを単なる商売道具としか見ず、ただ金、金、金。しかしクグは、オツベルのような失敗はしなかった。クグはオツベルのように一頭の象しか相手にしなかったのではなく、ピピと象、母親、そして「観客」の良心までも道具とした。クグのようなやり方を続けるといづれオツベルのようになると思う。(1年男子)

挙例6の学習者は「どういう話か解らなかった」(傍線)が「金星サーカスのクグは、…(中略)…人や動物、命あるものを単なる商売道具としか見ず、ただ金、金、金」(波線)とする。用例中、「金星サーカスのクグ」と「オツベル」とを重ねているが、「オツベル」とは宮沢賢治「オツベルと象」の登場人物のことで、自分の金儲けのために白象を酷使し続けて、結局、白象の仲間たちにつぶされるという人物でもある。つまり、この学習者も団長クグを批判することで本話の解りにくさの落としどころを探ろうとしているわけだが、注目すべきはオツベルの場合と重ねながら「クグのようなやり方を続けるといづれオツベルのようになると思う」(括弧)と団長クグの失敗を確かな予測として書き付けることだ。

もちろん、本教材テキストで語られていたことはそれとは正反対の、団長クグの成功という現実である。だから、挙例6の括弧内は、学習者の「心の形に合うように」書き換えられた〈物語〉といえよう。その意味で、ここにも、テキストの側の異質さを「自分の心の形に合う」ように成型して「現実のすべりをよく」しようとする。そうした姿が露わだ。

なるほど、本教材テキストは学習者にとって読解するのに難しい。というのも、街の人々に共感しつつ読む読者にとって、本話が悪人の成功と善人の失敗を結局は差し出すという点で、期待通りにならない話題構成だからだ。むしろ、そこには、読者の期待を裏切り違和感を惹起させることで、感動的なお話の舞台裏を照射しようとする書き手の工夫があろう。だが、多くの学習者が「空中ブランコ乗りのキキ」の場合と同様に、自分の期待通りにならない叙述を排除して書き換えることで読解の実感を得ようとするのである。

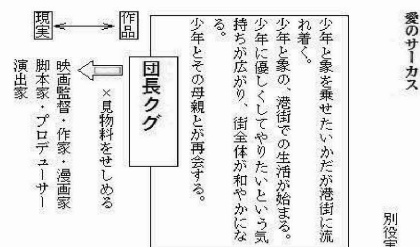
3-3. 授業の実際

示範授業はこうした学習者の読みの課題に応えるものとして着想された。本時の学習の展開(【図1】)と板書計画(【図2】)を次に挙げる*注3。

【図1】学習の展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の実際
20	導入 ・本時の学習内容を確認する。	・範読。 ・前時プリント(感想文)を返却する。 ・感想文を読み合う。 ・本時の目標を伝える。	
	展開1 ・「愛のサーカス」を読む。	・読者の「期待の地平」を祖述し、発表する。 ・物語を構造的に捉える。 ・クグの役割を捉え直す。	A① ノートへの記入、発表で評価する。 I① 発表者や授業者の説明を聞く様子で評価する。
40	展開2 ・物語の問い掛けに迫る。	・作中人物の差し出され方を問う。	A①I①ウ①エ① 話し合いや発表の様子で評価する。
48	終結 ・次時の学習内容を確認する。		

【図2】板書計画



そこでは、まず、学習者の共有するクグ排除の欲望をあぶり出し、クグが仕掛けた演出としてのお話の部

分（作品）とその種明かしが語られる部分（現実）とに分けて本話の構造的特徴を学習者と押さえた（【図1】「展開1」）。また、問題は排除される叙述にこそ書き手の工夫があることに、いかに気付かせるかにあったわけだが、授業での授業者の側からの働きかけを考える際、次の議論を参考にしている。

7（※創造）行為の時間の内部に身を置くととは、たとえば、この画布のこの箇所にこの色の染みが置かれているのは単に偶然の所産にすぎず、まったく別の色が置かれることも十分にありえたと考えてみることだ。…（中略）…創造の「今」とは、画家なら画家が或る色と別の色との間で逡巡し、決断を下した「行為の今」のことである。（松浦寿輝「表象と確率—第1巻のためのプロレゴメナ」『表象のディスクール① 表象 構造と出来事』所載、東京大学出版会、2000）

松浦寿輝は他者の創造行為といかなる発想で接近すべきかを説く。ある特定の時代・社会・文化に生きる人間が、どれほどの表現上の選択肢を眺め、そこで何を思索し、結果何を選択したのか。そのように創造されたものを眺めてみると「行為の今」にはじめて「身を置く」ことができるということだ。「行為」とは学習者にとって他者としてある書き手の言語行為のことであるならば、この呼び掛けは作品を前にしてそれを書き付けた書き手の工夫を学習者の視野に再びおさめるのに有効なものである。

従って、示範授業では、話題の構造的な特徴を押さえた上で、学習者たちの「心の形」に即して立ち上がっている疑問、それは団長クグのしたことを許せるのか許せないのかというものだろうが、そうした疑問が読者の側に生じるように書き付ける書き手の工夫をこそ考えるように促した（【図1】「展開2」）。

4. テキストの他者性との出会い

見ず知らずの少年を思いやる街の人々とその思いやりに囲まれて幸せになる少年との心温まるお話。仮に「愛のサーカス」という教材テキストがそのような形でも物語として十分に通用したはずだ。だが、書き手はそこで書き付けることを止めずに、心温まるお話を相対化するような団長クグ登場以降の展開をわざわざ書き付けようとするのである。その間にこそ、書き手が相手取ろうとしている問題がある。換言すれば、感動的な物語と人間とのあり方についての、他者の思索がある。

示範授業では、その思索と学習者との出会いを、学

習者が書き手の創造行為の「今」を引き受けるように促すことで企てたのだが、こうした発想からするテキスト理解のトレーニングは物語や説明文の読解力をだけ育むものではあるまい。

多様の他者に対して自己の価値観から排除・抑圧を慎み向き合う姿勢について、「思いもしなかった人や招来していなかった人、完全に見知らぬ訪問者として到来した人、誰だか分からない人や予想もしていなかった人、要するにまったく他者に対して、あらかじめ開かれている、あるいは開かれつづけている、ということ」（J. デリダ, J. ハーバーマス, G. ボッラドリ『テロルの時代と哲学の使命』（藤本一勇・澤里岳史訳、岩波書店、2004））として、これを「歓待」の姿勢と呼ぶ議論がある。物語や説明文は他者の言語行為である。書き付けられた文章と出会って、即座に自分の感じ方を立ち上げ我有せず、他者の相手取る問題領域とその応答に目配せし自らも参入する。そうしたトレーニングは「歓待」の姿勢につながりうるものであろう。

【注】

注1) 別役実「空中ブランコ乗りのキキ」の初発の感想には大別して3類型見えた。①キキの語られ方（「悲しそうに鳴きながら」）を踏まえずに意地っ張りという点で称揚するもの。②キキの語られ方を踏まえずに命を粗末にするなど批判するもの。③キキの語られ方を踏まえて批判するもの。以上である。

注2) こうした小川洋子の議論の背景には、精神療法からの「物語論」の影響があろう。一方で、自己と物語との関係に注目する「物語論」は社会学や哲学でも議論されてきた。それぞれの〈物語〉という術語の意味するところは、個人の依って立つ世界認識の枠組みという点で同じだが、社会学や哲学では世界認識の変容をも視野に入れて「物語論」及び〈物語〉という術語の検討を行ってきた。その過程と精神療法からの「物語論」の課題とを整理したものに坂本佳鶴恵『アイデンティティの権力—差別を語る主体は成立するのか』（新曜社、2005）がある。小川洋子と後出の鷺田清一とは、前者が〈物語〉の役割を人間にとっての救いとし後者が負の側面をも指摘するという点で〈物語〉という術語の使い方に温度差があるが、鷺田清一のそれは社会学や哲学での検討にも目配せしたものだからであろう。

注3) 示範授業と学習者の初発の感想とは、詳しくは学部附属共同研究資料編（当校国語科刊）を参照。